

武家政権の成立

12世紀末の内乱の中から、最初の本格的な武家政権である鎌倉幕府が誕生した。鎌倉幕府は承久の乱やモンゴル襲来を経て全国政権に成長するとともに、幕府に集った武士たちも守護や地頭として全国に展開していった。武士の勢力拡大は、鎌倉時代の政治や社会にどのような影響をもたらしたのだろうか。

5

1 鎌倉幕府の成立

源平の争乱

平氏一門の繁栄は、後白河法皇や院近臣との対立を招き、1177(治承元)年には藤原成親や僧の俊寛(1138～77)らと、京都郊外の鹿ヶ谷で平氏打倒をはかり、失敗する事件がおこった。

た(鹿ヶ谷の陰謀)。そこで平清盛は1179(治承3)年、

武力を背景に後白河法皇を鳥羽殿に幽閉し、関白以下多数の貴族を処罰し、官職を奪う強圧的手段で国家機構のほとんどを手中におさめた。さらに翌年には高倉天皇の中宮である娘徳子(建礼門院)の生んだ子を安徳天皇として即位させ、外戚の地位も手に入れた。

ここに清盛の権力集中は頂点に達するかにみえたが、かえって中央の貴族・大寺院や地方の武士団のあいだで平氏の専制政治に対する不満が高まった。

この情勢をみた後白河法皇の皇子以仁王と、畿内に基盤をもつ源氏の源頼政は、平氏打倒の兵をあげ、挙兵を呼びかける以仁王の命令(令旨)が諸国の武士に伝えられた。

これに応じて、園城寺(三井寺)や興福寺などの僧兵が立ち上がり、つづいて伊豆に流されていた源頼朝や信濃の木曾谷にいた源義仲をはじめ、各地の武士団が挙兵して、ついに内乱は全国的に広がり、5年にわたって争乱が続いた(治承・寿永の乱)。

平氏は当初、都を福原(神戸市)に移した。福原は近

源平の争乱(月は陰暦による、*印は幕府設立関係)

1177. 5	鹿ヶ谷の陰謀
1179. 11	平清盛、後白河法皇を幽閉
1180. 2	安徳天皇即位
5	以仁王・源頼政ら挙兵、敗死
6	福原遷都(11月には京都に戻す)
8	源頼朝挙兵、石橋山で敗れる
9	源義仲挙兵
10	*頼朝鎌倉入り。富士川の戦い
11	*頼朝、侍所を設置
12	平重衡、南都を焼打ち
1181. 閏2	清盛の死(64歳)
4～	養和の飢饉
1183. 5	倶利伽羅峠(砺波山)の戦い
7	平氏の都落ち、義仲入京
10	*後白河法皇、頼朝の東国支配権を認める
1184. 1	源範頼・義経、義仲を討つ
2	摂津一の谷の戦い
10	*頼朝、公文所・問注所を設置
1185. 2	讃岐屋島の戦い
3	長門壇の浦の戦い、平氏滅亡
11	*頼朝、守護・地頭を設置
1189. 9	頼朝、奥州平定
1192. 7	*頼朝、征夷大将軍となる

く良港大輪田泊があり、瀬戸内海支配のための平氏の拠点であったが、この遷都には大寺院や貴族たちが反対したため、平氏は約半年間で都を京都に戻し、畿内を中心とする支配を固めてこれらの動きに対応した。しかし、清盛の突然の死や、畿内・西国を中心とする飢饉などで平氏の基盤は弱体化し、1183(寿永2)年に北陸で源義仲に敗北すると、平氏は安徳天皇を奉じて西国に都落ちした。その後、都に入



た義仲と対立した後白河法皇の要請を受け、源頼朝は弟の源範頼・義経の軍を上洛させて義仲を滅ぼし、さらに平氏と戦い、摂津の一の谷、讃岐の屋島の戦いを経て、ついに1185(文治元)年に長門の壇の浦で平氏を滅亡させた。

鎌倉周辺図 鎌倉は源頼義以来、源氏とのゆかりが深い地で、三方を小さな丘陵に囲まれ、南は海にのぞむ要害の地であった。

この一連の争乱で大きな活躍をしたのは、地方の武士団であった。彼らは国司や荘園領主に対抗して所領の支配権を強化・拡大しようとつとめ、そのための新たな政治体制を求めている。



鎌倉幕府

反平氏の諸勢力のうち、東国の武士団の大半が武家の棟梁源氏の嫡流である頼朝のもとに結集したため、頼朝はもっとも有力な勢力に成長した。頼朝は挙兵すると、相模の鎌倉を根拠地として広く武士たちと主従関係を結び御家人として組織し、東国の荘園・公領を支配して彼らの所領支配を保障していった。1183(寿永2)年には、平氏の都落ちのあと、京都の後白河法皇と交渉して、東海・東山両道の東国①の支配権の承認を得た(寿永二年十月宣旨)。

Q▶ 鎌倉幕府はどのような過程を経て成立したのだろうか。

1185(文治元)年、平氏の滅亡後、頼朝は義経と対立するようになった。義経が法皇から頼朝追討令を与えられて挙兵するも失敗すると、頼朝は軍勢を京都に送って法皇にせまり、義経追討を名目として諸国に守護②を、荘園や公領には地頭を任命する権利や1段当たり5升の兵糧米を徴収する権利、さらに諸国の国衙の実権を握る在庁官人を支配する権利を獲得した。こうして東国を中心にした頼朝の支配権は西国にもおよびはじめ、武家政権としての鎌倉幕府が確立した。

①幕府の支配権が強力におよぶ東国の範囲は、やがて遠江・信濃以東の15カ国とされた。

②守護は当初、惣追捕使や国地頭などとも呼ばれたが、のちに守護に統一された。

Q▶ 下司などの荘官と地頭の、共通点と相違点は何だろうか。

①幕府とは、もともと出征中の将軍が幕を張って、その中で軍務を決裁した陣営を指す漢語であるが、日本では近衛大将や征夷大将軍の中国風の呼び方として用いられ、転じて武士の首長が打ちたてた政権を指す語となった。なお、征夷大将軍は本来は蝦夷を討つための臨時の将軍を意味していたが、頼朝が任命されて以後、武家政権の統率者の地位を示す官職となっていった。

②侍所の長官(別当)には東国御家人の和田義盛が任じられたが、公文所(政所)の長官(別当)は大江広元、問注所の長官(執事)は三善康信で、ともに貴族出身であった。

③大犯三カ条は、諸国の御家人に天皇・院の御所を警護させる京都大番役の催促と、謀叛人・殺害人の逮捕で、平時の守護の職務でもっとも重要なものであった。

④地頭は平氏政権のもとも一部におかれていた(→p.82)が、頼朝はその職務を明確にするとともに、任免権を国司や荘園領主から奪って幕府の権利とした。

Q▶ 武士たちが源頼朝に従い、御家人となっていたのはなぜだろうか。

その後、頼朝は逃亡した義経をかくまったとして奥州藤原氏を滅ぼし、陸奥・出羽を支配下においた。1190(建久元)年には上洛して右近衛大将となり、1192(建久3)年、後白河法皇の死後には征夷大将軍^{ぐん}に任じられた。こうして鎌倉幕府が成立してから滅亡するまでの時代を鎌倉時代と呼んでいる。

幕府の支配機構は、簡素で実務的なものであった。鎌倉には中央機関として、御家人を組織し統制する侍所^{さむらいどころ}、一般政務や財政事務をつかさどる政所^{まんじどころ}(初めは公文所)、裁判事務を担当する問注所^{もんちゅうじょ}などがおかれ、京都からまねいた下級貴族を中心とする側近たちが将軍頼朝を補佐した②。

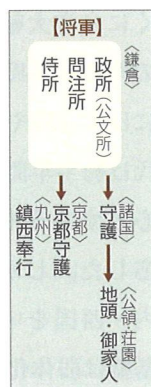
地方には守護と地頭^{しご じとう}がおかれた。守護は原則として各国に1人ずつ、おもに東国出身の有力御家人が任命された。軍事指揮官として国内の御家人を指揮して、平時は大犯三カ条^{だいはん}③など治安の維持と警察権の行使に当たった。とくに東国では国衛の在庁官人^{こくが ざいちょうかんじん}を支配し、地方行政官としての役割も果たした。地頭は御家人の中から任命され、おもに平家没官領^{へいけもつかんりょう}を中心とする謀叛人の所領^{むはん}におかれ、年貢の徴収・納入と土地の管理および治安の維持^{ねんぐ}を任務とした④。

また、京都には京都守護がおかれ、朝廷との交渉や西国の御家人の統轄に当たった。九州におかれた鎮西奉行^{ちんせい ぶぎょう}はこの地域の御家人を統轄するとともに、大宰府の実権も握った。

幕府と朝廷

幕府支配の根幹となったのは、将軍と御家人との主従関係である。頼朝は主人として御家人に対し、おもに地頭に任命することによって、先祖伝来の所領の支配を保障したり(本領安堵^{ほんりょうあんど})、新たな所領を与えたりした(新恩給与^{しんおんきゅうよ})。この御恩^{ごおん}に対して御家人は、戦時には軍役を、平時には京都大番役^{きょうおはんやく}や幕府御所を警護する鎌倉番役などをつとめて、従者として奉公^{ほうこう}した。

こうして院政期以来、各地で開発領主として下司などの荘官^{しょうかん}をつとめて勢力を拡大してきた武士団、とくに東国武士団は御家人として幕府のもとに組織され、地頭に任命されて、所領を支配することを将



鎌倉幕府の機構
(頼朝時代)

軍から保障された^⑤。

このように土地の給与を通じて、主人と従者が御恩と奉公の関係によって結ばれる制度を^{ほうけん}封建制度というが、鎌倉幕府は^{ほうけん}封建制度にもと

5 めて日本の^{ほうけん}封建制度が国家的制度として成立した。

東国は実質的に幕府の支配地域であり、幕府が行政権や裁判権を握り、東国以外の国々でも^{こくし}国司の支配下にある国衛の任務は守護を通じて幕府に吸収されていった^⑥。しかし、この時代には、京都の朝廷や貴族・大寺社を中心とする荘園領主の力もまだ強く残っていた。朝廷

10 は国司を任命して全国の一般行政を統轄し、貴族・大寺社は^{ずりょう}受領や荘園領主として、土地からの収益の多くを握っており、そのもとには幕府に属さない武士たちも多くいた。政治の面でも経済の面でも、^け公家^⑦と武家との二元的な支配がこの時期の特徴であった。

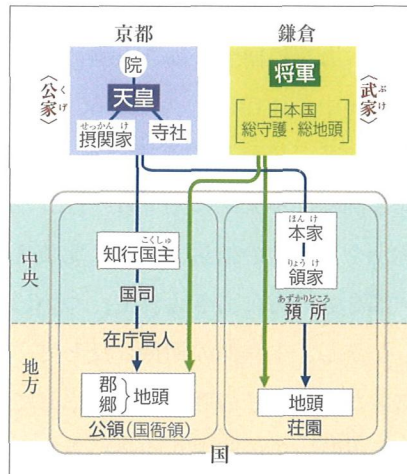
将軍である頼朝自身も多くの^{ちぎょうこく}知行国^(関東知行国)や平家没官領をはじめとする大量の荘園^(関東御領)を所有しており、これが幕府の経済的基盤となっていた^⑧。

幕府と朝廷との関係は、^{しんせい}新制^⑨と呼ばれる朝廷の法令や宣旨で定められており、朝廷と幕府は支配者としての共通面をもっていた。幕府は守護・地頭を通じて全国の治安の維持に当たり、また年貢を納入し

20 ない地頭を罰するなど、一面では朝廷の支配や荘園・公領の維持を助けた。

しかし幕府は、東国はもちろん、東国以外でも支配の実権を握ろうとしたために、守護・地頭と国司・荘園領主とのあいだでしだいに紛争が多くなっていた。各地で荘官などが地頭へ

25 かわっていき、幕府による現地支配力が強まると、対立も深まっていた。



公武二元支配の機構

^⑤御家人の中でも西国御家人の多くは地頭に任じられず、守護を通じて御家人として登録され、京都大番役などをつとめた。

^⑥一国内の荘園・公領ごとの田地の面積や、荘園領主・地頭を調査した^{おおたふみ}大田文は、本来国衛の土地台帳としてつくられたものである。その大田文を幕府が国衛の在庁官人に命じてつくらせていることは、国衛に対する幕府の支配力を示している。

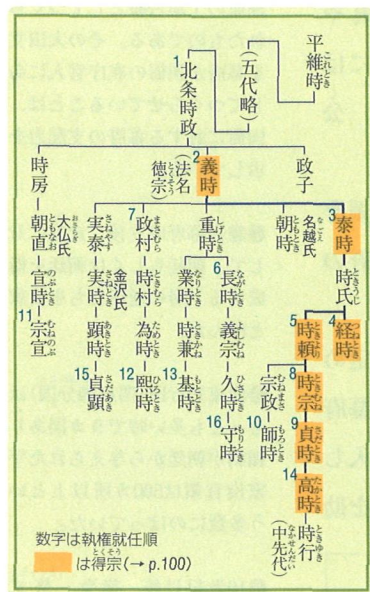
^⑦鎌倉幕府成立後、^{ぶけ}武家に対して、朝廷もしくは朝廷を構成する上層の^{ていしん}廷臣たちを公家と呼んだ。

^⑧関東知行国(関東御分国)は、もっとも多い時で9カ国あり、頼朝が朝廷から与えられた平家没官領は500カ所以上という多数にのぼっていた。

^⑨10世紀以後、^{きやくしき}律令・格式の編纂のちに朝廷から出された法令はしだいに新制と呼ばれるようになり、荘園整理令も新制の1つである。こうした公家法としての新制は引き続き鎌倉時代にも出され、やがて幕府もこれにならって新制と呼ばれる法を出すようになった。

① 頼朝の死後、大江広元・三善康信ら貴族出身の頼朝側近と、北条時政・梶原景時・三浦義澄・比企能員・和田義盛ら有力御家人からなる13名の合議制によって政治がおこなわれた。

② この時、時政は頼家の後見の比企能員を滅ぼし(比企氏の乱)、頼家を伊豆の修禪寺に幽閉して、翌1204(元久)年に暗殺した。



北条氏略系図

③ 北条義時は実朝の死後、皇族を将軍にまねく交渉をしたが、上皇の拒否により交渉は不調に終わった。そこで幕府は、頼朝の遠縁に当たる摂関家出身の幼い藤原頼経を後継者に迎えた。以後2代続いた摂関家出身の将軍を、藤原將軍または摂家將軍と呼ぶ。

④ 後鳥羽上皇は隠岐に、土御門上皇は土佐(のちに阿波)に、順徳上皇は佐渡に流された。

2 武士の社会

北条氏の台頭

幕府政治はすぐれた指導者である源頼朝が將軍独裁の体制で運営していたが、頼朝の死後、子の頼家と実朝の時代になると、御家人中心の政治を求める動きが強まった①。それとともに有力な御家人のあいだで政治の主導権をめぐる激しい争いが続き、多くの御家人が減んでいった。その中で勢力をのばしてきたのが、伊豆の在庁官人出身の北条氏である。

1203(建仁3)年、頼朝の妻北条政子の父である北条時政は、

將軍の頼家を廃し②、弟の実朝を立てて幕府の実権を握った。この時政の地位は執権と呼ばれて、子の義時に継承されたが、さらに義時は、侍所の長官(別当)であった和田義盛を滅ぼし(和田合戦)、政所と侍所の別当を兼ねてその地位を固めた。これ以後、執権は北条氏一門のあいだで世襲されるようになった。

承久の乱

朝廷では、幕府の成立と勢力拡大に直面して、政治の立直しがおこなわれた。その中心にあったのが後鳥羽上皇である。上皇は、分散していた数多くの皇室領の莊園を手中におさめるとともに、新たに西面の武士において軍事力の増強をはかるなどして院政を強化し、朝廷の勢力を挽回する動きを強めた。

その中で1219(承久)年、上皇との連携をはかっていた將軍源実朝が頼家の子公暁に暗殺される事件がおこった。これをきっかけに、朝幕関係が不安定になり④、1221(承久3)年、上皇は、畿内・西国の武士や大寺院の僧兵、さらに北条氏の勢力増大に反発する東国武士の一部をも味方に引き入れて、ついに北条義時追討の兵をあげた。

しかし、上皇側の期待に反して、東国武士の大多数は源頼朝の妻であった北条政子の呼びかけに応じて幕府側に結集した。幕府は、義時の子泰時、弟の時房らが率いる軍を送って京都を攻め、その結果、1カ月ののちには、戦いは幕府の圧倒的な勝利に終わった。これが承久

の乱である。

乱後、幕府は後鳥羽上皇
ら3上皇を配流する④とと
もに、後鳥羽上皇の孫 仲
恭 天皇を廃し、後堀河天
皇を即位させた。また、京
都守護にかわり新たに六波
羅探題をおいて、朝廷を監
視し、京都の内外の警備、
および西国の統轄に当たら
せた。さらに、上皇方につ
いた貴族や武士の所領3000
余カ所を没収し、戦功のあ
った御家人らをその地の地
頭に任命した⑤。

これによって畿内・西国

の莊園・公領にも幕府の力が広くおよぶようになった。朝廷では以後
も引き続き院政がおこなわれたが、この乱によって、朝廷と幕府との
二元的支配の状況は大きくかわり、幕府が優位に立って、皇位の継承
や朝廷の政治にも干渉するようになった。

執権政治

承久の乱後の幕府は、3代執権北
条泰時の指導のもとに発展の時期

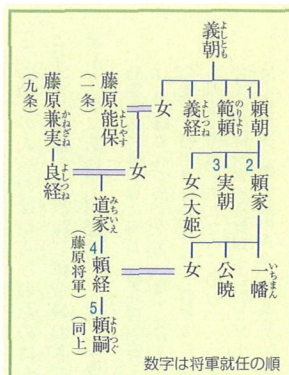
を迎えた。政子の死後、泰時は、執権を補佐する
連署をおいて北条氏一門の有力者をこれに当てた。

ついで有力な御家人や政務にすぐれた者を評定
衆⑥に選んで、執権・連署が主導する評定衆の
会議(評定)で合議制にもとづいて幕府の政治や裁
判に当たらせた。

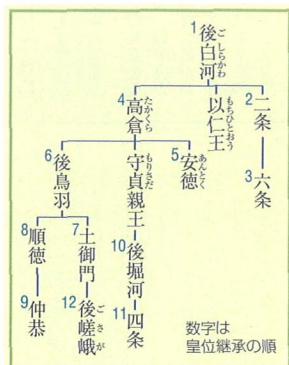
1232(貞永元)年には、泰時は御成敗式目(貞永
式目)51カ条を制定して、広く御家人たちに示し
た。この式目は頼朝以来の先例や、道理と呼ばれ

執権政治の確立(月は陰暦による)

1199. 1	源頼朝死去。源頼家、家督を相続
4	有力御家人の合議制により、源頼家の 親裁を制限
1200. 1	梶原景時、討伐され、敗死
1203. 9	北条時政、比企能員を討つ(比企氏の乱) 北条時政、源頼家を修禅寺に幽閉
	源実朝、将軍就任
	北条時政、政所別当となる
1204. 7	源頼家、修禅寺で謀殺される
1213. 5	北条義時、和田義盛を滅ぼす(和田合戦)
1219. 1	源実朝、暗殺される(源氏の正統断絶)
6	藤原頼経、鎌倉に下向
1221. 5~6	承久の乱。六波羅探題の設置
1225	北条時房、連署となる(連署の初め)
1225. 12	評定衆の設置
1226. 1	藤原頼経、将軍となる(藤原将軍の初め)
1232. 8	御成敗式目の制定
1247. 6	三浦泰村の挙兵、敗死(宝治合戦)
1249. 12	引付衆の設置
1252. 4	宗尊親王、将軍となる(皇族将軍の初め)



源氏略系図(2) (→p.77)

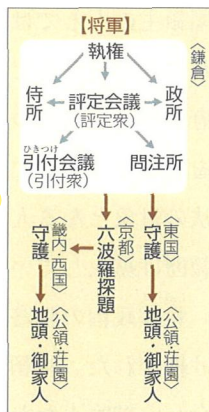


天皇家略系図

⑤ 承久の乱後に新しく地頭を
おく際に、これまで給与が少
なかった土地では、新たに基
準(新補率法)を定めて新補地
頭の給与を保障した。その基
準とは、(1)田畑11町ごとに
1町の土地、(2)田地1段につ
き5升の米(加徴米)、(3)山
や川からの収益の半分を、そ
れぞれ地頭に与えるというも
のであった。

Q▶ 鎌倉幕府と朝廷の関係
はどのように変化していっ
たのだろうか。

⑥ 評定衆は重要な職として有
力御家人から選ばれたが、や
がて北条氏一門が多く任命さ
れるようになった。定員はな
いが、ほぼ14~15人であった。



鎌倉幕府の機構
(執権時代)

御成敗式目

一三 諸国守護人奉行の事。

右、右大將家^①の御時定め置かる、所は、大番催^{おほばんさい}促^{せう}・謀叛^{まうはん}・殺害人^{ころしやうじん}・山賊^{さんさく}・海賊^{かいさく}等の事なり。

一五 諸国地頭、年貢所^{としこう}當^{あた}を御留^{おどめ}せしむる事。

右、年貢を抑留^{おどめ}するの由、本所^{ほんじよ}の訴訟^{そしやう}有らば、即ち結解^{けつげ}を遂げ勘定^{かんじやう}を請^こべし。

一八 御下文^{ごくだうもん}を帶すと雖も知行^{ちぎやう}せしめず、年序^{ねんじゆ}を経る所領^{しやうりやう}の事。

右、当知行^{たうちぎやう}の後、廿ヶ年^{にじふ}を過ぎば、大將家の例に任せて理^{ことわり}非^ひを論^{ろん}ぜず改替^{かいかい}に能はず。

一三 右、法意^{はふい}の如くばこれを許さずと雖も、大將家御時以来^{おときより}當世^{たうせい}に至るまで、其の子無きの女人等^{にむすめら}、所領を養子^{やしやう}に譲^{ゆづ}り与ふる事、不易^{ふいぎ}の法^{はふ}勝計^{しょうけい}すべからず^①。

式目制定の趣旨——北条泰時書状^②
(原漢文)

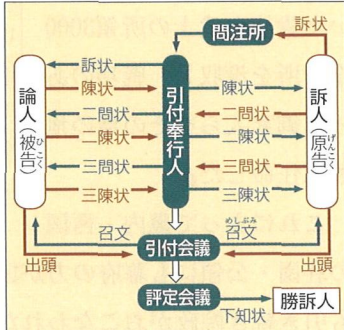
さてこの式目をつくれ候事は、なにを本説^{ほんせつ}として注し載せらる、の由、人々^{ひとら}さだめて謗難^{ぼうなん}を加ふる事候か。ま事にさせる本文^{ほんぶん}にすがりたる事候はねども、たゞどうりのおすところを記され候者也。……この式目は只かなをされる物の世間におほく候ごとく、……武家の人へのはからひのためばかりに候。これによりて、京都の御沙汰^{ごさた}、律令^{りつりやう}のおきて、聊^{いささ}もあらたまるべきにあらず候也。

① 源頼朝。② 年貢に同じ。③ 莊園領主。④ 決算。⑤ 監査を受けよ。⑥ 幕府が出す本領・安堵・新恩・給与の下文。⑦ 事実上の支配。⑧ 相当期間の年数。⑨ 律令に従つて。⑩ 後世にかわらぬ法。⑪ 数え切れない。⑫ 一二三(貞元元年九月十一日付で、泰時が六波羅探題として在京中の弟の重時にあてた書簡)。⑬ 根拠。⑭ 朝廷の人々。⑮ 漢籍などで典拠となった文章。

た武士社会での慣習・道徳にもとづいて、守護や地頭の任務と権限を定め、御家人同士や御家人と莊園領主とのあいだの紛争を公平に裁く基準を明らかにしたもので、武家独自の最初の整った法典であった。

幕府の勢力範囲を対象とする式目と並んで、朝廷の支配下にはなお律令の系統を引く公家法が、また莊園領主のもとでは本所法が、それぞれの効力をもっていた。しかし、幕府の勢力拡大につれて、公平な裁判を重視する武家法は、公家法や本所法の対象となる人々にも影響を与えるようになり、その効力のおよぶ範囲は拡大していった^①。

執権政治の隆盛をもたらし泰時の政策は、孫の執権北条時頼に受け継がれた。時頼は、評定のもとに新たに引付^{ひきつけ}において引付衆を任命し、御家人たちの所領に関する訴訟を専門に担当させ、迅速で公正な裁判の確立につとめた^②。一方で時頼は、独自の力をもちはじめた前將軍藤原頼經^{ふじわらよりつね}を京都に送還し、頼經と結んだ有力御家人らに失脚さ



訴訟制度の仕組み 訴人から幕府に訴えがあると、問注所で訴状が受理され引付に回されたのち、訴えられた論人に対して陳状の提出が命じられ、以後、三問三答のやりとりがある。その後、引付会議で対決がおこなわれ、審理が尽くされて評定会議で判決が出され、勝訴した者に將軍の下知状が与えられる。

①その後、必要に応じて発布された個別の法令は式目追加と呼ばれ、のちの室町幕府の法令も、建武年間(1334~36年)以後の式目追加という意味で建武以来追加と呼ばれた。これは御成敗式目が室町幕府のもとでも基本法典とみなされていたことを示している。

Q▶ 鎌倉幕府が御成敗式目を定めたり、裁判制度を整えたりしたのはなぜだろうか。

②引付は当初、一番・二番・三番の3つに編成され、それぞれ評定衆の中から頭人が選ばれ、そのもとに数名の引付衆が加わって判決原案を作成し、原案は評定にかけて決定された。

せ、さらに1247(宝治元)年には、三浦泰村一族を滅ぼして(宝治合戦)、北条氏の地位を不動のものとした。また、朝廷に政治の刷新と制度の改革を求めた結果、後嵯峨上皇の院政下で院評定衆がおかれるなど、幕府は朝廷の内部に深く影響力をもつようになった。

やがて幕府は、藤原将軍にかわる皇族(親王)将軍として、後嵯峨上皇の皇子宗尊親王を迎えた。皇族将軍は以後4代続いたが、いずれも実権はなく名目だけの将軍にすぎなかった。また、時頼は禅宗の本格的寺院である建長寺を造営するなど、鎌倉を武家の都として整えた。こうして執権政治は時頼のもとでさらに強化されたが、同時に北条氏独裁の性格を強めていった。

武士の生活

この頃までの武士は開発領主の系譜を引き、先祖以来の地に住み着いて、所領を拡大してきた。彼らは、河川の近くの微高地を選んで館をかまえ、周囲には堀・溝や塀をめぐらした。館の周辺部には、年貢や公事のかからない直営地を設け、下人と呼ばれる従者や所領内の農民を使って耕作させた。さらに荒野の開発を進め、みずからは地頭など現地の管理者として、農民から年貢を徴収して国衙や荘園領主におさめ、定められた収入として加徴米などを得ていた。

武士の家では所領を一族の子弟・子女にわけ与える分割相続を原則としていたが、一族の同族意識も強かった。宗家(本家)の代表は惣領(家督ともいう)と呼ばれ、それ以外の庶子に対して血縁による統制をおこない、その集団は一門・一家と称された。戦時には、一門は惣領を指揮官として、団結して戦った。平時でも、先祖や一門の氏神の祭祀をおこなう権利は惣領にあり、それはまた義務でもあった。

こうした体制を惣領制と呼ぶが、鎌倉幕府の政治・軍事体制はこの惣領制にもとづいており、幕府への軍事勤務(軍役)も、荘園領主・国衙への年貢や公事の納入も、惣領が責任者となって一門の庶子たちにこれを割り当て、一括して奉仕した。庶子も御家人ではあったが、幕府とは惣領を通じて結ばれていた。

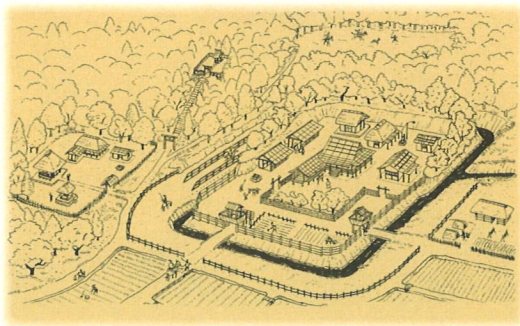
Q 北条氏はどのようにして幕府の中で力を握っていたのだろうか。

③ 武芸の練習の場や防御設備などを設けた一種の城であると同時に、農業経営の中核としての機能をもっていた。その建物は掘立柱の主屋や郎等の詰める侍からなる簡素なものであった。

④ 個・門田・正作・用作などと呼ばれた。

⑤ 結婚形態としては嫁入婚が一般的となったが、当時の家族制度では、女性の地位は比較的高く、相続の際も男性と同じく財産を分配され、女性が地頭になる例もみられた。

開発領主の館 『一遍上人絵伝』などの絵巻物にみえる武士の館や、考古学の発掘調査をもとに復元したもの。周辺に門田などの直営地もあり、左手に氏寺もみえる。





笠懸 笠を的にした騎射の訓練。のちに笠のかわりに板を用いた。『男衾三郎絵巻』、部分、東京国立博物館蔵

武士の生活は簡素で、みずからの地位を守るためにも武芸を身につけることが重視され、つねに**流鏑馬・笠懸・犬追物**や**巻3つの的を次々に射る**、**笠を的に騎射する**狩などの訓練をおこなった。彼らの日常生活の中から生まれた「弓馬の道」などと呼ばれる道徳は、武勇を重んじ、主人に対する献身や、一門・一家の名誉を尊ぶ精神、恥を知る態度などを特徴としており、後世の**武士道**の起源となった。

武士の土地支配

所領支配を拡大しようとする武士たちは、**荘園・公領**の領主や、近隣の武士とのあいだで年貢の徴収や境界の問題をめぐる紛争をおこなうことが多かった。

とくに承久の乱後には、畿内・西国地方にも多くの地頭が任命され、東国出身の武士が各地に新たな所領をもつようになって、現地の支配権をめぐる紛争はますます拡大した。幕府が公正な裁判制度の確立につとめたのは、こうした状況に対応するためであった。

地頭の支配権拡大の動きに直面した荘園・公領の領主たちも、幕府

に訴えて地頭の年貢未納などの動きをおさえようとした。しかし、現地に根をおろした地頭の行動をおさえることは難しく、領主たちは紛争解決のために、やむを得ず荘園現地の管理いっさいを地頭に任せて、一定の年貢納入だけを請け負わせる**地頭請所**の契約を結んだり、現地を地頭と折半し、相互の支配権を認めあう**下地中分**の取決めをおこなったりすることもあった。

伯耆国東郷荘の下地中分図 13世紀半ば荘園領主と地頭とのあいだで下地中分が成立したのにもとづいて作成された絵図。田地・山林・牧野などを、それぞれ地頭分・領家分に2分している。分割線の左右には幕府の執権・連署が認定したことを示す花押が記されている。（模本、東京大学史料編纂所蔵）



3 モンゴル襲来と幕府の衰退

モンゴル襲来

にっそう 日宋間の正式な国交は開かれなかったが、へいし 平氏政
権の積極的な海外通交後、鎌倉幕府のもとでも、
民間商人の貿易や僧侶の往来などはさかんにおこなわれ、日本列島は
南宋を中心とする東アジア通商圏の中に組み入れられていった。

この間、13世紀初めにモンゴル(蒙古)高原にチンギス=ハン(成吉思汗)
Chinggis Khan 1167?~1227
が現れ、モンゴル諸部族を統合して中央アジアから南ロシアま
でを征服した。ついでその後継者はヨーロッパ遠征をおこない、また
金を滅ぼして広大なユーラシア大陸の東西にまたがる大帝国を建設し
た。チンギス=ハンの孫フビライ(クビライ、忽必烈)は、中国を支配
Khubilai 位 1260~94
するため都を大都(北京)に移し、国号を元と定めた。
さらに高麗を全面的に服属させると、日本に対して
も強く朝貢を要求してきた。

しかし、時頼の子で幕府の執権となった北条時頼
ほうじょうとき 1251~84
がこれを拒否したため、元は高麗の軍勢もあわせ
た約3万の兵で、1274(文永11)年、対馬・壱岐を攻
め、大挙して九州北部の博多湾に上陸した。幕府は
九州地方に所領をもつ御家人を動員して迎え撃った
が、元軍の集団戦やすぐれた兵器に対し、一騎打ち



13世紀半ばの東アジア

元軍との陸戦の図
文永の役における
陸戦の一場面。日
本の騎馬武者は、
この絵巻をつくら
せた肥後の竹崎季
長である。元軍は
「てっほう」と呼ば
れる火薬を利用し
た武器を使用して、
日本軍を苦しめた。
(「蒙古襲来絵詞」、
部分、宮内庁三の丸
尚蔵館蔵)





石築地跡(元寇防壁) 生の松原に残る元軍防御の防壁跡。

一部復元。(福岡市)

① 異国警固番役は文永の役の前から始まり、九州地方の御家人に課せられた。文永の役後には大幅に整備され、防壁の構築は御家人だけではなく、九州地方の所領所有者らにも割り当てられた。

② とくに高麗は30年余りモンゴル軍に抵抗したのちに服属したものの、以後も三別抄の乱など様々なかたちで抵抗を続けた。フビライは日本との交渉や戦いに高麗を利用したが、高麗の元に対する抵抗の継続は、日本遠征の障害となった。また旧南宋の勢力や大越(ベトナム)の人々にも元への抵抗の動きがおり、3度目の日本侵攻を断念させる要因にもなった。

Q▶ モンゴル襲来をきっかけに、鎌倉幕府の政治体制はどのように変わっていったのだろうか。

③ 北条氏の嫡流の当主のことで、得宗の名は義時が徳宗と号したことに由来するといわれる。



モンゴル襲来関係図

た。ところが、防壁によって博多湾岸への上陸をはばまれているあいだに暴風雨がおこって元軍は大損害を受け、再び敗退した(弘安の役)。この2回にわたる元軍の襲来をモンゴル襲来(蒙古襲来、元寇)という。

再度にわたる襲来の失敗は、元に征服された高麗や旧南宋の人々の抵抗によるところもあったが、幕府の統制のもとに、おもに九州地方の武士がよく戦ったことが大きな理由であった。

モンゴル襲来後の政治

元はその後も日本征服を計画していたので、幕府も警戒態勢をゆるめず、九州地方の御家人を引き続き異国警固番役に動員した。また、幕府は御家人以外の荘園・公領の武士をも動員する権利を朝廷から獲得するとともに、モンゴル襲来を機会に西国一帯に支配を強めていった。とくに九州の博多には北条氏一門を鎮西探題として送り、九州地方の政務や裁判、御家人の指揮に当たらせた。

幕府の支配権が全国的に強化されていく中で、北条氏の権力はさらに拡大し、なかでも宗家の家督を継ぐ得宗の勢力が強大となった。それとともに得宗の家臣である御内人と御家人との対立が激しくなり、時宗の子の北条貞時の代になって、1285(弘安8)年に御内人の中心人物(内管領という)の平頼綱が有力御家人の安達泰盛を滅ぼした(月騷動)。さらに貞時はその頼綱を滅ぼし、幕府の全権を握った。

こうして得宗の絶大な権力のもとで、御内人や北条氏一門が幕政を主導するようになった。これを得宗専制政治と呼ぶ。全国の守護の半

朝鮮半島からの東路軍4万人と中国本土からの江南軍10万人で構成された

戦を主とする幕府軍は苦戦した。しかし元軍も損害が大きく、内部の対立などもあって退いた(文永の役)。

その後、幕府は再度の襲来に備えて、博多湾岸など九州北部の要地を御家人に警備させる異国警固番役を強化し、博多湾沿いに石造の防壁(石築地)を構築させた。そこに南宋を滅ぼした元が、再び日本の征服を目指し、1281(弘安4)年、約14万の大軍をもって九州北部にせまっ

分以上は北条氏一門が占め、各地の地頭職の多くも北条氏の手に帰した。

琉球とアイヌの動き

モンゴルの動きが東アジアに大きな影響を与える中、日本列島の南の琉球



琉球の三山分立

では、各地の首長である按司がグスクを拠点として勢力を広げていき、やがて山北(北山)・中山・山南(南山)の3つの勢力に統合されていった。琉球では、それまでの貝塚後期文化を経て12

世紀頃から農耕生活が始まり、グスクが形成されてきた。グスクは当初は集落や聖地からなっていたが、その指導者である按司の成長とともに、しだいに立派な石垣による城がつくられるようになった。

一方、北の蝦夷ヶ島では、古代には縄文文化を経て、擦文文化やオホーツク文化が広がっていたが、13世紀にはアイヌの文化が生まれ、津軽の十三湊を根拠地として得宗の支配下にあった安藤(安東)氏と交易をおこなっていた。アイヌのうちサハリン(樺太)に住んでいた人々は、たびたびモンゴルと交戦していた。

社会の変動

モンゴル襲来の前後から、農業の発展が広くみられ、畿内や西国では麦を裏作とする二毛作が普及してい

った。肥料には山野の草や木が使われ、鉄製の農具や牛馬を利用した農耕も広がっていった。また、荏胡麻(灯油の原料)などが栽培され、絹布や麻布などが織られた。鍛冶・鋳物師・紺屋などの手工業者は、農村内に住んで商品をつくったり、各地をわたり歩いたりして仕事をした。

荘園・公領の中心地や交通の要地、寺社の門前などには、地元の特産品や米などを売買する定期市が開かれ、月に3回開かれる三度の市(三斎市)も珍しくなかった。さらに中央から地方の市に織物や工芸品などを運んでくる行商人も現れた。

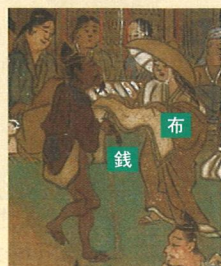
京都・奈良・鎌倉などには高級品を扱う手工業者や商人が集まり、定期市のほかに常設の小売店(見世棚)も出現した。京都や奈良では、すでに平安時代の後期頃から、大寺社に属する神人や天皇家に属する供御人と呼ばれる人々が販売や製造についての特権を認められて商業に従事していたが、やがて同業者の団体である座を結成するように

④ 縄文文化は、縄文文化に続く稲作をとまわらない文化である。擦文文化は独特の文様の土器をもつ文化で、東北北部から北海道・サハリンに分布し、オホーツク海沿岸に分布するオホーツク文化と並存していた。

⑤ この時期には多収稲米である大唐米も輸入され、肥料には草を刈って田に敷く刈敷や、草木を焼いて灰にした草木灰を利用した。

読みといてみよう

なぜこのような市が開かれたのだろうか。扱われている商品や備前国福岡という立地に着目して説明してみよう。



備前国福岡の市
1278(弘安元)年、
備前の福岡の市で
布教する一遍(左
端の僧)が、刀を
もった男に襲われ
ている図。市日
には、道路を挟ん
で建てられた仮小
屋に、所狭しと品
物が並べられ、活
発に商品の販売が
おこなわれていた
ことがわかる。
(「一遍上人給伝」、
部分、清浄光寺蔵、
神奈川県)

なった。

遠隔地を結ぶ商業取引も盛んで、陸上交通の要地には宿が設けられ、各地の湊(港)には、商品の委託販売や中継・運送をおこなう間(問)丸が活躍した。売買の手段としては、米などの現物にかわって貨幣が多く用いられるようになり、荘園の一部では年貢の銭納もおこなわれたが、それにはもっぱら中国から輸入された宋銭が利用された。さらに遠隔地間の取引には、金銭の輸送を手形で代用する為替が使われ、金融業者の借上も多く現れた。様々な人や物が集まる宿や湊は町として発展し、有徳人と呼ばれる富裕な人々が成長していった。

また、荘園領主や地頭の圧迫・非法に対する農民の動きが活発となり、団結して訴訟をおこしたり、集団で逃亡したりする例も多くなった。年貢を農民が定額で請け負うこともおこなわれた。

幕府の衰退

生産や流通経済のめざましい発達と社会の大きな変動の中で、幕府は多くの困難に直面していた。モンゴル襲来は御家人たちに多大な犠牲を払わせたが、幕府は十分な恩

Q▶ 鎌倉時代には、なぜ貨幣が多く用いられるようになったのだろうか。また、貨幣の普及は社会にどのような変化をもたらしたのだろうか。

紀伊国阿武河荘民の訴状^①

阿テ河ノ上村百姓ラツ、シテ言上^②一
 ランサイモクノコト^③、アル
 イワチトウノキヤウシヤウ^④、
 アルイワチカフ^⑤トマウシ、カ
 クノコトクノ人フヲ、チトウノ
 カタエセメツカワレ候ヘハ、ヲ
 マヒマ^⑥候ワス候。ソノ、コリ
 ワツカニモレフコリテ候人フヲ
 サイモクノヤマイタシ^⑦エ、
 イテタテ候エハ、テウマウノ
 アト^⑧ノムキマケト候テ、
 ライモトシ^⑨候イヌ。コレヲ^⑩
 カコノムキマカヌモノナラハ、
 メコトモヲライコメ、ミ、ヲキ
 リ、ハナソソキ、カミヲキリテ
 アマニナシテ、ナワホタシヲウ
 チテ^⑪、サエナマント候ウテ、
 セメセンカウ^⑫セラレ候アイタ
 ランサイモクイヨ^⑬／＼ヲソナワ
 リ^⑭候イヌ。

(高野山文書、原文のまま)

① 一二七五(建治元年)十月二十八日
 のもの。② 荘園領主へおさめる材木
 が遅れていること。③ 京都に行く
 ④ 近所で使役される人夫役。⑤ 労力
 と時間。⑥ 地頭から出された残りの
 人数。⑦ 荘園領主へおさめる材木
 を山から引き出すこと。⑧ 逃亡した
 百姓の耕地。⑨ 山から百姓を追い返
 す。⑩ お前たち。⑪ 縄やひもで縛っ
 て。⑫ せつかんする。⑬ 遅れる。

永仁の徳政令

一² 質券売買地^①の事。

右、所領を以て或いは質券に入れ流し、或い
 は売買せしむるの条、御家人等^②俵僚^③の基なり。
 向後^④に於いては、停止に従ふべし。以前沽
 却^⑤の分に至りては、本主^⑥領掌^⑦せしむべし。
 但し、或いは御下文^⑧・下知状^⑨を成し給ひ、
 或いは知行^⑩廿箇年を過ぎば、公私の領を論ぜ
 ず、今更相違有るべからず。……
 次に非御家人・凡下の輩^⑪の質券買得地の
 事。年紀^⑫を過ぐと雖も、売主知行せしむべし。

(東寺百合文書、原漢文)

① 質入れや、売買した土地。② 困窮する。③ 今後。
 ④ 売却。⑤ 領有して支配すること。⑥ 幕府が土地の
 譲渡・売却を認めた公文書。⑦ 一般庶民。具体的に
 は借上。⑧ 取得時効二〇年。



借上 13世紀前半、京都から鎌倉へ訴訟にくだった
 女性が金に困り、借上から金を借りているところ。縁側
 には長くつないだ銭がおかれている。

(「山王 顔令記絵巻」、部分、和泉市久保記念美術館蔵、大阪府)

質^{しょう}を与えることができず、御家人たちの信頼を失う結果になった。

また、分割相続^①の繰り返しによって所領が細分化されたうえ、売買や
 質入れによって所領を失う御家人も少なくなかった。こうした動きに
 ともなって、女性の地位が低下の傾向をみせはじめ、女性に与えられ
 る財産が少なくなり、また本人1代限りでその死後は惣領^{そうりょう}に返す約
 束⁵つきの相続(一期分^{いちごぶん})が多くなった。当時の執権は北条貞時

幕府は、1297(永仁5)年に永仁の徳政令^{とくせいれい}を發布して、御家人の所領
 の質入れや売買を禁止し、それまでに質入れ・売却した御家人領を無
 償^{しょう}で取り戻させ、御家人が関係する金銭の訴訟^{そしょう}を受けつけないこと
 とした。しかし、御家人が所領を手放す動きをとめることはできな
 かった。

中小の御家人の多くが没落していく一方で、経済情勢が転換する機
 会をうまくつかんで勢力を拡大する武士も生まれた。とくに畿内やそ

Q ▶ 鎌倉幕府は、なぜ永仁
 の徳政令を發布することに
 なったのだろうか。

の周辺では、地頭^{じとう}や非御家人^{ごけにん}の新興武士たちが武力に訴えて年貢^{ねんぐ}の納入を拒否するなど、荘園領主^{しょうえん}に抵抗するようになった。これらの武士は当時悪党^{あくとう}と呼ばれ、その動きはやがて各地に広がっていった。

このような動きをしずめるために、北条氏得宗^{とくそう せんせい}の専制政治は強化されたが、それはますます御家人の不満をつのらせる結果となった。こうして幕府の支配は動揺するようになった。

4 鎌倉文化

鎌倉文化

鎌倉時代は、公家が文化の担い手となって伝統文化を受け継ぎながらも、一方では武士や庶民に支持された新しい文化が生み出され、しだいに成長していった時代である。その文化は、公家や武士などの家や集団に継承されていった。

新しい文化を生み出した背景の1つは、武士の素朴で質実な気風が文学や美術に影響を与えるようになったことで、もう1つは日中間を往来した僧侶・商人らによって、南宋や元の文化がもたらされたことである。

Q▶ 平安時代に流行が始まった浄土教から、鎌倉時代にはどのような教えが生まれたのだろうか。

鎌倉仏教

仏教では、それまでの祈禱や学問中心のものから、内面的な深まりをもちつつ、庶民など広い階層を対象とする新しい教えへの変化が始まった。

その最初に登場したのが、浄土教の流れをくむ法然^{ほうねん}である。天台の教学を学んだ法然^{ほうねん}は、源平争乱の頃、もっぱら阿弥陀仏の誓いを信じ、念仏^{ねんぶつ}（南無阿弥陀仏）をとすれば、死後は平等に極楽浄土に往生^{じょうじう}できるという専修念仏^{せんじゆ}の教えを説いて、のちに浄土宗の開祖と仰がれた。法然の教えは摂関家の九条兼実^{くじょうかねみ}をはじめとする公家のほか、武士や庶民にまで広まったが、一方で旧仏教側からの非難が高まり、法然は土佐（実際は讃岐）に流され、弟子たちも迫害された。

親鸞^{しんらん}もこの時、法然の弟子の1人として越後に流されたが、のちに関東の常陸に移って師の教えを一步進め、煩惱の深い人間（悪人）こそが、阿弥陀仏の救いの対象であるという悪人正機^{しやうき}を説いた。その教えは農民や地方武士のあいだに広まり、やがて浄土真宗^{しんしゅう}（一向宗）と

宗派	開祖	主要著書	中心寺院
浄土宗	法然	選択本願念仏集 (せんじやく)	知恩院 (京都)
浄土真宗	親鸞	教行信証 (一遍上人語録) 一遍は死の直前、 著書・経典を焼き捨てた	本願寺 (京都)
時宗	一遍		清浄光寺 (神奈川)
臨済宗	栄西	興禅護国論	建仁寺 (京都)
曹洞宗	道元	正法眼蔵	永平寺 (福井)
日蓮宗 (法華宗)	日蓮	立正安国論	久遠寺 (山梨)



新仏教の宗派一覧

踊念仏 一遍は全国を遊行したため遊行上人と呼ばれ、一遍に従った人々は時衆といわれた。写真は、京都の市屋道場で一遍が弟子たちと鉦を打ち、床を踏みながら踊っているところ。(『一遍上人絵伝』、部分、東京国立博物館蔵)

呼ばれる教団が形成されていった。

同じ浄土教の流れの中から、やや遅れて出たのが一遍である。一遍は、善人・悪人や信心の有無を問うことなく、すべての人が救われるという念仏の教えを説き、念仏札を配り、踊念仏によって多くの人々に教えを広めながら各地を布教して歩いた。その教えは時宗と呼ばれ、地方の武士や庶民に受け入れられた。

ほぼ同じ頃、従来の法華信仰をもとに、新しい救いの道を開いたのが日蓮である。初め天台宗を学び、やがて法華経を釈迦の正しい教えとして選んで、題目(南無妙法蓮華経)をとなえることで救われると説いた。鎌倉を中心に、他宗を激しく攻撃しながら国難の到来を予言するなどして布教を進めたため、幕府から迫害を受けたが、日蓮宗(法華宗)は関東の武士層や商工業者を中心に広まっていった。

関東を中心に武士のあいだに大きな勢力をもつようになったのは、禅宗である。坐禅によってみずからを鍛錬し、釈迦の境地に近づくことを主張する禅宗は、12

悪人正機——『歎異抄』
「善人②なをもちて往生をとぐ、いはんや悪人①をや。しかるを、世のひとつねにいはいはく、『悪人なを往生す、いかにいはんや善人をや』と。この条、一旦そのいはれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは、自力作善の人は、ひとへに他力をたのむこゝろかけたるあひだ、弥陀の本願③にあらず。……煩惱具足④のわれらは、いづれの行にても生死をはなる、ことあるべからざるを哀たまひて、願をこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因⑤なり。よりて善人だにこそ往生すれ、まして悪人は」と仰さふらひき。
①親鸞の死後、弟子の唯門が親鸞の教えの乱れるのを嘆いて、正しい親鸞の教えを書き記した書物。②難行苦行にたえ、正直慈悲の心をもった仏のような人。③あらゆる苦悩を身につけ、仏教的善を何一つなし得ない人。④阿弥陀仏の四十八願の中の第十八願を本願という。これを信じ念仏をとえれば、どのような悪人も幸せになれるという阿弥陀の約束。⑤あらゆる悩みや不幸を身につけていること。悪人Ⅱ凡夫Ⅱ人間のこと。⑥もともと正しい条件。

Q▶ 禅宗は、どのように広
まっていたのだろうか。

Q▶ 栄西や道元らが日本と
中国のあいだを行き来し
たり、蘭溪道隆や無学祖元が
来日したりすることができ
たのはなぜだろうか。

① 臨済宗は坐禅ざぜんの中で師から
与えられる問題を1つひとつ
解決して(公案問答こうあんもんどう)、悟りに
達することを主眼とするところ
に、曹洞宗はひたすら坐禅
すること(只管打坐じくわんだざ)によって
悟りの境地を体得しようとし
たところに特徴がある。

② 忍性は奈良に病人の救済施
設北山十八間戸を建て、施
療や慈善につくした。

③ 度会家行は『類聚神祇本
源』を著し、従来の本地垂迹
説(→p.66)と反対の立場に立ち、
神を主として仏を従とする神
本仏迹説をと考えた。

世紀末に、南宋に渡った天台の僧なんそう栄西えいさいによって日本に伝えられた。栄
西は密教みつぎょうの祈禱きとうにもすぐれ、公家や幕府有力者の帰依を受けて、の
ちに臨済宗りんざいしゅうの開祖と仰がれた。幕府は臨済宗を重んじ、栄西の死後、
南宋から来日した蘭溪道隆らんけいどうりゅう・無学祖元むがくそげんら多くの禅僧をまねいて、鎌
倉に建長寺けんちようじ・円覚寺えんがくじなどの大寺院をつぎつぎと建立していった。そ
れは、禅宗のきびしい修行が武士の気風にあっていたためであるが、
海外の新しい文化を吸収する目的もあった。

禅宗の中で、ただひたすら坐禅ざぜんに徹せよと説き、曹洞宗そうとうしゅうを広めた
のが道元どうげんである。栄西の弟子に学んだ道元は、南宋に渡ってさらに禅
を学び、坐禅そのものを重視する教えを説いて、越前に永平寺を開い
た。その弟子たちは旧来の信仰も取り入れて各地で布教を進めたので、
曹洞宗は広く地方に広まっていた①。

こうした鎌倉時代に広まった新仏教に共通する特色は、天台・真言
をはじめ旧仏教の腐敗を批判し、選びとられたただ1つの道(念仏・
題目・禅)によってのみ救いにあずかることができると説き、広く武
士や庶民にも門戸を開いたところにあって、のちに教団のかたちをと
って継承されていった。

このような新仏教に刺激されて、旧仏教側も新たな動きをみせた。
鎌倉時代の初め頃、法相宗ほっそうしゅうの貞慶じょうけいや華嚴宗けごんしゅうの明恵みょうえ(高弁こうべん)は、戒律
を尊重して南都仏教の復興に力を注いだ。やや遅れて律宗りっしゅうの叡尊えいそんと
忍性にんしょうらは、戒律を重んじるとともに、貧しい人々や病人の救済・治療、
湊や橋の修理などの社会事業にも力をつくし②、鎌倉幕府に受け入れ
られ、多くの人々に影響を与えた。

なお、旧仏教各宗のもとでは古くからの山岳宗教と結びついた修験
道が広くおこなわれた。また神仏習合しんぶつしゅうごうの考えが広まるとともに、鎌
倉時代末期になると、鎌倉仏教の影響を受けた独自の神道理論が、伊
勢外宮の神官度会家行わたらいいえゆきによって形成され、伊勢神道(度会神道)と呼
ばれた。

もと北面の武士で俗名は佐藤義清

中世文学のおこり

文学の世界でも、新しい動きが始まった。武
士の家に生まれた西行さいぎょうは、出家して平安時
代末期の変動する諸国を遍歴しつつ、すがすがしい秀歌をよんで歌集

『山家集』を残した。歌人としても知られた鴨長明は、『方丈記』を著して人間も社会も転変してすべてはむなしいと説いた。承久の乱の直前に、『愚管抄』で歴史を貫く原理を探り、道理による歴史の解釈を試みた慈円も含め、彼らの作品には、浄土への往生を願う当時の仏教思想が表れている。

後鳥羽上皇の命で『新古今和歌集』が編纂された影響は大きく、編者の藤原定家・藤原家隆らが示した歌風は、平安時代の伝統に学んで、技巧的な表現をこらしながらも、観念的な美の境地を生み出した。こうした作風は後鳥羽上皇を中心とする貴

族たちに広く受け入れられて、多くのすぐれた和歌がよまれ、定家らは和歌の家を形成した。上皇の影響を受けて将軍源実朝も歌に励み、万葉調の歌をよんで、『金槐和歌集』を残した。このように、作歌に励む武士も少なくなかった。

この時代の文学の中で、もっとも特色があるのは、戦いを題材に武士の活躍ぶりをいきいきと描き出した軍記物語である。なかでも平氏の興亡を主題とした『平家物語』は、『琵琶法師』によって平曲として語られたことにより、文字を読めない人々にも広く親しまれた。

説話文学では、承久の乱後に『古今著聞集』など多くの作品が生まれた。その系譜を引く兼好法師の『徒然草』は、著者の広い見聞と鋭い観察眼による随筆の名作で、鎌倉文化の特色がよく表されている。

学問では、公家のあいだで、過ぎ去ったよき時代への懐古と尊重から、朝廷の儀式・先例を研究する有職故実の学や古典の研究が盛んになった。その一方で、鎌倉の武士たちも執権政治のもとでの合議制や『御成敗式目』をつくるなど、内外の文化や学問への関心をもつようになり、幕府の歴史を編年体で記した史書『吾妻鏡』も編まれた。北条氏一門の金沢実時とその子孫は、鎌倉の外港として栄えた六浦の金沢に金沢文庫を設け、和漢の書物を集めて学問に励んだ。

この時代の末期には、宋の朱熹が打ち立てた儒学の1つである宋学(朱子学)が伝えられた。そのうちの大義名分論が与えた影響は大きく、後醍醐天皇を中心とする討幕運動の理論的なよりどころともなった。



琵琶法師(『纂婦絵詞』、部分、西本願寺蔵、京都府)

④ 慈円は、鎌倉幕府開創期に源頼朝と親しかった摂政・関白九条兼実の弟で、天台座主の要職にもあり、承久の乱を前にして後鳥羽上皇を中心とした討幕計画をいさめるねらいもあって『愚管抄』を著した。



東大寺南大門(左)と円覚寺舍利殿(右) 大仏様は用材の規格を統一し、梁や貫などの構造材を装飾としながら、少ない用材で短期間に巨大な建造物を建てるのに適していた。東大寺南大門(高さ26m、奈良県)はその代表である。禅宗様も貫を用いて構造を強化し、急勾配の屋根、軒の強い反りなどを特徴とする。なお、現在の円覚寺舍利殿(高さ10m、神奈川県)は室町時代の建物で、別の寺院にあったものを移建したという説が有力である。

Q▶ 東大寺の再建は、鎌倉時代の文化にどのような影響を与えたのだろうか。

美術の新傾向

美術の諸分野でも新しい傾向がおこっていた。そのきっかけとなったのは、源平の争乱によって焼

失した奈良の諸寺の復興である。^{ちようげん}重源^{かんじんしょうにん}は勧進上人^{→ p.90}となって復興資金を広く寄付に仰いで各地をまわり、宋人^{そう}陳和卿^{ちん な けい}の協力を得て東大寺の再建に当たった。その時に採用されたのが、大陸的な雄大さ、豪放な力強さを特徴とする^{だいぶつよう}大仏様^{なんだいもん}の建築様式で、東大寺南大門が代表的遺構である。

つづいて、^{せんしゅうよう}禅宗様^{からよう}(唐様)が伝えられた。この様式は細かな部材を組み合わせて、整然とした美しさを表すのが特徴で、^{えんがくじしやりでん}円覚寺舍利殿などの禅寺の建築に用いられた。一方、大陸伝来の新様式の構築法を、平安時代以来の日本的なやわらかな美しさをもつ和様に取り入れた^{ちゆうよう}折衷様^{せつ}も盛んになった。

彫刻の分野では奈良の諸寺の復興とともに、奈良仏師の^{ぶつし}運慶^{うんけい}・^{たんけい}湛慶^{? ~ 1223 1173 ~ 1256}父子や^{かいけい}快慶^{生没年不詳}らが、仏像や肖像彫刻をつくり出した。奈良時代以来の彫刻の伝統を受け継ぎつつ、新しい時代の精神を生かした力強い写実性や、豊かな人間味の表れが、彼らの作風の特徴である。鎌倉時代中期になると、大陸から新しい技術が伝えられて鎌倉の大仏がつくられたが、これは幕府の援助を得て、勧進上人が人々の寄付を受けてつくられたものである。

絵画では、平安時代末期に始まった^{え まきもの}絵巻物^{えまきもの}が全盛期を迎えた。物語絵巻のみならず、この時代には武士の活躍を描いた『蒙古襲来絵詞』^{もう こしゅうらい え ことば}
^{→ p.99 写真}



東大寺南大門金剛力士像(阿形) 東大寺南大門の左右に立つ約8.5mにおよぶ木造の仁王像。阿形と呼形がある。
^{うん}運慶・^{かん}快慶^{うん}らが分担して70日ほどで制作したもので、そのみなぎる力強さは勃興する武士の力を示すかのようである。(高さ8.39m、奈良県)



『春日権現験記絵』 春日明神の縁起を描いた絵巻物。写真は、春日神社の本殿の前で、春日明神が乗り移った女性が神官や僧侶らに託宣^{たくせん}を告げている場面。
(部分、宮内庁三の丸 尚蔵館蔵)

などの合戦絵巻が制作され、また『春日権現験記絵』などの寺社の縁起や『一遍上人絵伝』などの高僧の伝記などが、民衆に教えを広めるために制作された。

個人の肖像を描く写実的な^{にせえ}似絵には、藤原隆信^{たかのぶ}・信実父子の名手が^{のぶざね}出た。似絵は肖像彫刻の発達と並んで、この時代に個性に対する関心が高まってきたことをよく示している。禅宗の僧侶が師僧の肖像画(頂相^{ちんざう})^(ちんそう)①を崇拜する風習も鎌倉時代の中頃に中国から伝わった。

書道では、法性寺流の優美な書に加えて、宋・元の書風が伝えられると、平安時代以来の和様をもとにして、伏見天皇の皇子尊円^{そんえん}入^{ふし}道親王^{どうしんのう}が、宋の書風を取り入れて青蓮院流^{しょうれんいんりゅう}を創始した。工芸では、武士の成長とともに武具の制作が盛んになり、刀剣では備前の長光^{ながみつ}、京都の藤四郎吉光^{とうしろうよしみつ}、鎌倉の正宗^{まさむね}らが現れ、名作を残した。

また、宋・元の強い影響を受けながら、尾張の瀬戸焼^{せとやき}②や常滑焼^{とこなめやき}、備前の備前焼^{びぜんやき}など、各地で陶器生産が発展をとげた。それらの陶器は日本列島に広く流通し、京都・鎌倉をはじめとして、備後の尾道^{びんご}など各地の湊^{みなと}や宿^{しゆく}といった町の遺跡から発掘されている。



赤糸威 鎧^{あかいとおどしよろい}
(胴高85cm、武蔵御嶽神社蔵、東京都)

① 頂相彫刻とともに、次の室町時代に全盛期を迎えた。

② 道元とともに入宋した加藤景正^{かげまさ}が釉^{うわぐすり}を用いる中国の製法を伝え、瀬戸の陶器(瀬戸物)をつくりはじめたという。この伝承^{でんしょう}は今では事実の裏づけがないとされているが、瀬戸焼の多くに宋や元の製品の強い影響が認められる。

第6章のまとめ

- 問1 鎌倉幕府が武士の力を広く集めることができた理由として、考えられることは何だろうか。
- 問2 鎌倉時代後半に悪党^{あくどう}が活動するようになった経緯や背景を、政治・経済・社会の側面から考えてみよう。
- 問3 鎌倉時代を2つの時期に分けるとしたら、いつを境に分けられるだろうか。その理由もあわせて考えてみよう。